

「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである」

A (マタイ10章40節)

マタイ福音書は、イエスが十二使徒を選び、福音のメッセージを告げ知らせるために派遣する様子を語っています。

キリスト者にはみな、弟子たちのように使命があります。柔和な心を保ち、まずは生活を通して、それから言葉を用いて、自分たちが出会った神の愛を証しすることです。そうすることで、周りのすべての人たちにも、同じように喜びを味わってもらえるようにするという、使命です。



「イエスは、私たち一人ひとりを限りなく受け入れて下さる天の御父の愛を示されたのです。それなら、私たちもお互いにこのような愛を持つべきではないでしょうか。」

このみ言葉を、まずそれぞれの家庭、共同体、学校、スポーツの場で生きるように努めましょう。

自分の中から裁き、差別、恨み、人を許せない心を取り除くようにしましょう。

このような心は、容易にしかも頻繁に姿を見せますが、人間関係を損ない、冷たくし、まるで錆のように相互の愛を妨げるものです。

相手を受け入れること、自分と違う人を受け入れることはキリスト教的愛の土台です。

そして、とくに現代、イエスとその建設に私たちを招いておられる『愛の文明』、『交わりの文化』に向かって、私たちが踏み出すべき第一歩、出発点なのです。」1



「きょうだい愛の美しさを証しする」

弟子たちは自らの弱さの中にあっても、神に受け入れられた体験があったからこそ、きょうだいを温かく迎えることができました。それが彼らの証しでした。

往々にして、社会的成功や身勝手な自由を追求する現代社会にあって、キリスト者は、互いに手を差し伸べ合うきょうだい愛の美しさを証しするよう招かれています。



「僕らの経験」

「僕の学校では、みんな自分のことばかり考えている感じで、がっかりしていた。『やあ』って、ちょっとした言葉を交わすことすら難しかった。

でも、自分から歩み寄るようにして、そのうち友だちができて始めた。一人、すごく悲しそうなお友だちがいた。誰も口をきかない風だった。それで特に彼に話しかけるようにした。あるとき、彼は絶望していることを打ち明けてくれた。何も不足するものはないけど、人生が満たされない。いろんな本の中に真理を探している。世の中にはこんなに多くの苦しみがあるのに、どうやって神を信じられるのか分からない、と。どこにも答えが見つけられず、自殺しようと考えたと。

僕は、彼に「どんなことがあっても僕は君に寄り添うから」と伝えた。

それから、他の友だちと一緒に、いくつかの科目を教えてもらうことにした。彼に、自分は何かの役に立つ人間だということを感じてもらいたかったからだ。

彼は信仰についていろいろ聞いてきたので、Teens for unity (一致をめざす青少年たち)の集いにも招待した。

集いに参加した後、彼はみんなに言った。「みんなとは初めて会ったけど、僕がずっと探していた答えをもらった。神は愛で、自分が愛するとき、神は僕らの内にいるんだ、と。」

その後彼はゆるしの秘跡を受け、長く行てなかったミサに行くようになった。「君と、君の友人たちが、僕のいのちを救ってくれたんだ」と彼は僕にささやいた。

(R君・ブラジル)